

琉球波照間方言の音対応と音変化

大野真男*

(1988年10月13日受理)

1. 波照間方言の音韻体系

波照間島は八重山諸島に属し、北緯24度2分・東経123度42分は有人島として日本最南端に当たる。面積は12.46平方キロ、人口は1985年現在721人、かつては鰹漁業で栄えた島であったが現在では砂糖黍が主産業となっている。八重山の英傑オヤケアカハチ誕生の島でもある。

波照間方言には次の音素が認められる¹⁾。

母音音素 / i e ī ä a o u /

半母音音素 / j w /

子音音素 / ' h g k d t z c s r n b p f m /

拍音素 / N Q R /

波照間方言の音素について特色のある点をあげると次のようである。

- (1) 母音音素のうち、前舌母音として狭母音 /i/ のほかに半広母音 /e/ が認められる。
- (2) 母音音素のうち、中舌母音として広母音 /a/ のほかに半広母音 /ë/ および狭母音 /i/ が認められる。
- (3) 母音音素のうち、後舌母音として狭母音 /u/ のほかに半広母音 /o/ が認められる。
- (4) 子音音素のうち、/h/ のほかに /p/ が、他の多くの先島方言と同様に認められる。これらは本土方言のパ行音と異なり、外来語に限定されず、促音の直後といった音声環境にも指定されない。
- (5) 子音音素のうち、両唇無声摩擦の [F] (/hw/ に解釈される) のほかに、唇歯無声摩擦の /f/ が認められる。

波照間方言には次の拍構造が認められる。

CV CSV CSSV NQR

(Cは子音音素, Sは半母音音素, Vは母音音素, Nは撥音音素, Qは促音音素, Rは長音音素を表す。)

波照間方言に特徴的な音声現象として次のことがあげられる。

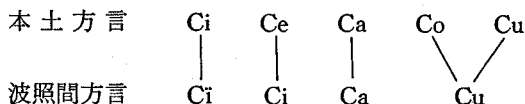
- (1) /r/ の子音の異音 (自由変異) として、一般の舌先弾き音のほかに、舌先の顫動を伴ういわゆる巻舌の [r̄] が発音される傾向が顕著である。
- (2) 先島方言の一般的傾向として、無声子音に挟まれた環境において、狭母音 [i・ī・u] に限らず、[sako:] (咳) のように広母音 [a] についても無声化する傾向にある。
- (3) 先行する無声子音と後続する [r・n・m・z・b] に挟まれた環境において、その広狭に関わらず母音が無声化する。またその際、[tuŋi] (鳥) のように後続する [r・n・m・z・b]

* 岩手大学教育学部

もそれぞれ無声化する。

2. 個別拍の対応

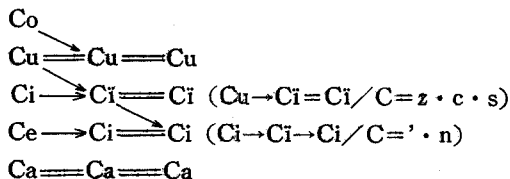
波照間方言の一般拍の対応は原則として次のようにまとめることができる。



ただし、後述するように /zu·cu·su/ は Cu と対応せずに、それぞれ /zi·ci·si/ のように Ci と対応している。その結果、後述するように /zi·ci·si/ のイ段音と中舌母音拍として統合しており、本土の東北方言などにおいてみられるいわゆるズーズー弁の状態と同様のものとなっている。

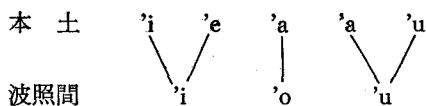
また、/i·ni/ は Ci と対応せずに、それぞれ /i·ni/ のように Ci と対応している。これは、他のイ段音と同様に一旦は Ci と変化したものが、八重山方言の中でも西表租納や与那国においてみられるようにもう一度 Ci に変化して、後述するように /e·ne/ と統合するに至ったものと考えられる²⁾。

これらのことから、波照間方言の一般拍についての音変化の歴史の概観を想定すると次のように示すことができる。



上記のような音変化の概略を想定しつつ、以下に波照間方言の音対応とその音変化の歴史を子細に検討する。

(1) 本土方言のア行音とは次のような対応関係を示す。



本土 /i·'e/ は /'i/ に統合している。

?ifi (石) ?ita (板) ?itu (糸) ?iru (色) ?inu (犬) ?io (縁) ?impitsi (鉛筆)³⁾

本土 /i·'e/ が /'i/ に対応している場合も認められる。

?issi (五つ) ?iri (西く入り) ?isi (息) ?ibi (海老)

またこの他、juda (枝) のように本土 /'e/ が /'ju/ に対応している例も見られる。

本土 /'a/ はそのまま /'a/ に対応している。

?amahap (甘い) ?arigup (歩く) ?agarup (上がる) ?atsahan (暑) ?an (有る)
?attsa (明日)

本土 /'o·'u/ は /'u/ に統合している。

?utu (音) ?ututu (弟) ?uki (桶) ?uja (親) ?udurugup (驚く) ?usi (牛・臼)

?ui (上) ?ugrirup (受ける) ?utagon (疑う)

この他に本土 /'i·'u/ が撥音 /N/ に対応している例、更に脱落している例がみられる。

ngun (行く) ndzirun (出る<いでる>) mman (馬) mahan (うまい) marirun (生まれる)

- (2) 本土地言のヤ行音とは次のような対応関係を示す。

本土	'ja	'jo	'ju
		/	/
波照間	'ja	'ju	

本土 /'ja/ はそのまま /'ja/ に対応している。

ja:tsi (八つ) jama (山) ja:gun (焼く) jamun (痛い<病む>) jasimun (休む)

本土 /'jo・'ju/ は /'ju/ に統合している。

juru (夜) jurtsi (四つ) jumi (嫁) jubun (呼ぶ) jumun (読む) ju: (湯) maju: (眉)

- (3) 本土地言のワ行音とは次のような対応関係を示す。

本土	'wi	'we	'wa	'wo
波照間	bi	bi	ba	bu

本土 /'wi/ (歴史的仮名遣いでキで表記される) は両唇閉鎖音の /bi/ に対応している。

birun (座る<ある>) bin (蘭)

本土 /'wa/ は /ba/ に対応している。

banu (私) bata (はらわた<わた>・綿) basi (鷲) ba:run (笑う・割る) bagasun (煮る<沸かす>) bagarun (分かる) bagahan (若い) baruhan (悪い)

本土 /'wo/ (歴史的仮名遣いでヲで表記される) は /bu/ に対応している。

butu (夫) bui (甥・姪<甥>) bunu (斧) buba (伯・叔母) budzama (伯・叔父) buduri (踊り) bututsi (一昨日) bun (居る<をる>) burun (祈る)

本土 /'wo/ が /u/ に対応している例もわずかにみられる。

?ugamun (拝む) ?uwarun (終わる)

本土 /'we/ (歴史的仮名遣いでエと表記される) も, birun (酔う<ゑう>) のように原則として両唇閉鎖音の /bi/ に対応していると考えられるが, kui (声) ?i: (絵) のように /i/ に対応している例もみられる。

- (4) 本土地言のハ行音 (<パ>行音) とは次のような対応関係を示す。

本土	hi	he	ha	ho	hu	hja
波照間	pi	pi	pa	pu	fu	pja

本土 /hi/ は両唇閉鎖音の /pi/ に対応している。

pi: (火) pin (日) piru (昼・ひる) pitu (人) pitu:tsi (一つ) pikun (引く) pikarun (光る)

本土 /hi/ が /pi/ に対応している例も見られる。

pinari (左) pini (髭) pinto: (返事<返答>)

本土 /he/ は /pi/ に対応している。

pin (屁) pira (唐鋤<へら>) pita (下手) pigun (削る<へぐ>)

本土 /ha/ は /pa/ に対応している。

pa:(葉) pan(歯・足<脛>) pana(鼻・花) pari(針) paka(墓) paku(箱) partsi(蜂) paton(鳩) panirun(跳ねる) pakarun(量る)

本土 /ho/ は /pu/ に対応している。

puni(骨) pu:(穂) putsī(星) putsu(へそ<ほぞ>) putugin(仏像<仏>) purun(掘る)

本土 /ho/ が, po:(帆) のように /po/ に対応している例も見られる。

また本土 /ho/ が /fu/ に対応している例もいくつか見られる。

fukudzī(埃) funto:(本当) fumirun(誉める)

本土 /hu/ は唇歯摩擦音の /fu/ に対応している。

funi(舟) futa(蓋) futji(筆) fukuru(袋) futartsī(二つ) futari(二つ) fun(振る) fukasun(沸かす<ふかす>) fukun(吹く)

本土 /ho/ が, fukurun(膨れる) のように /hu/ に対応している例も見られる。

本土 /hja/ は, pja:gu(百) のように /pja/ に対応している。

語頭のハ行音がパ行音と対応していることは、琉球方言の全般にわたって観察されることであり、このことは日本語のハ行音の上代以前の古態（ハ行音は古代以前の音でパ行音であったと推定される）をとどめているものと考えられている。そこで琉球方言の音対応を観察する場合、ハ行音ではなく古態のパ行音との対応を想定して考えていくことが必要である。

また, bui(甥<をひ>) ?ui(上<うへ>) のように語中のハ行に相当する子音が見いだされないことは、琉球方言においても本土方言と同様のハ行転呼がなんらかの段階で起こったことを示唆している。

ハ行においてオ段とウ段が統合せずに、それぞれ /pu/ と /fu/ のように子音において対立をとどめているのは先島方言全般の特徴となっている。これは、P→fの変化が他の母音よりもu母音の前において先行していたことを物語っていると考えられる⁴⁾。

(5) 本土方言のガ行音とは次のように対応関係を示す。

本土		gi	ge	ga	go	gu	gwa
		└─┬─┘			└─┬─┘		
波照間	N	gi	gi	ga	gu	gu	gwa

本土 /gi/ は語末以外では, nugiri(鋸) のように /gi/ に対応するが、語末においては撥音 /N/ に対応している。

fun(釘) ?on(扇) mun(麦) pan(足<脛>) ?unan(鰻)

本土 /gi/ が /gi/ に対応している例も見られる。

migi(右) dʒo:gi(定規)

本土 /ge/ は /gi/ に対応している。

pagiamasukuru(禿頭) nangirun(投げる) kongi(芝居<狂言>)

本土 /ge/ が, pini(髭) のように歯茎鼻音の /ni/ に対応している例も見られる。

本土 /ga/ はそのまま /ga/ に対応している。

gaku(学校) kangan(鏡) ?agarun(上がる) magarun(曲がる) pingan(彼岸) ?ugamun(拝む)

本土 /ga/ が, dzahan(苦い) のように歯茎破擦音の /za/ に対応している例も見られる。

本土 /go・gu/ は /gu/ に統合している。

gundzu (五十) gungwatsi (五月) sigutu (仕事) dzuguja (十五夜) da:gumutsi (団子餅) da:gu (道具) sigu (すぐ)

本土 /gu/ が, sinu (注ぐ) のように歯茎鼻音の /nu/ に対応している例も見られる。

本土 /gwa/ (合拗音) はそのまま /gwa/ に対応している。

gwannitsi (元日) ningwatsi (二月) sangwatsi (三月) singwatsi (四月) gungwatsi (五月)

本土 /gwa/ が, sagotsi (正月) ?ugondzu (拝所<拝み所>) のように /go/ に対応している例も見られる。

(6) 本土方言カ行音とは次のような対応関係を示す。

本土		ki		ke		ka		ko	ku		kwa
		↙	↘	↙	↘	↙	↘	↙	↘	↙	↘
波照間		kī	sī	ki	gi	ka	ga	ku	gu	fu	kwa

本土 /ki/ は, /kī/ に対応しているものと, 歯茎摩擦音の /sī/ に対応しているものがある。

kīsi (霧) kīniru (黄色) sīkin (<曆上の>月) tukī (時) sakī (先) kunī (根気) parīsiki (入れ墨<針突き>) <以上 /kī/ に対応>

sinu (昨日・着物<きぬ>) simu (肝) sisun (切る) sikun (聞く) ?isi (息) misi (神酒<みき>) ?usina (沖繩) ?assinē (商い) masipuduri (巻踊り) <以上 /sī/ に対応>

このように /ki/ の拍が /kī・sī/ の二つの拍に分化している条件は不明だが, /ki/→/kī/→/ci/→/sī/ という一連の変化過程のそれぞれ /ki/ 段階と /sī/ 段階に相当する語例と考えられる。そのように想定する理由として次の2点をあげることができる。

- ・本土 /ki/ が, portsī (箒) のように /ci/ に対応するものがある。
- ・本土 /ci・cu/ が /sī/ のほかに /sī/ 対応するものがある。(後述)

このほかに本土 /ki/ が /ki・ke/ に対応するものがある。

ki: (木) kidzi (傷) piki (系族<引>) siken (月)

また, dzigirun (出来る) のように有声化して /gi/ に対応するものもある。

本土 /ke/ は, /ki/ に対応しているものと, 有声化して /gi/ に対応しているものがある。語中で直前の拍が無声化しにくいものは /gi/ に, それ以外は /ki/ に対応する傾向が窺われる。

ki: (毛) kibusi (煙) saki (酒) ?uki (桶) taki (竹) jikin (試験) sakirun (裂ける) tasikirun (助ける) <以上 /ki/ に対応>

panaigi (花活け) putugin (仏像<仏>) ?ugirun (受ける) ?agirun (開ける) mazgirun (負ける) <以上 /gi/ に対応>

本土 /ke/ が, gidzimi (躰<けじめ>) のように語頭でも /gi/ に対応しているものもみられる。

本土 /ka/ は, そのまま /ka/ に対応しているものと, 有声化して /ga/ に対応するものがある。語中で直前の拍が無声化しにくいものは /ga/ に, それ以外は /ka/ に対応する傾向が窺われる。

ka: (匂い<香>) kan (蟹・神) kadzi (数) kami (亀) paka (墓) pakarun (量る)

fukasun (沸かす<ふかす>) pīkarun (光る) takahan (高い) sikahan (近い) <以上 /ka/ に対応>

naga (中) junaga (夜中) mugadzi (百足) ?iga (鳥賊) mugasi (昔) bagari (分家 <分かれ>) bagasun (煮る<沸かす>) bagarun (分かる) ?agarjan (明るい) bagahan (若い) <以上 /ga/ に対応>

本土 /ka/ が, garari (鳥) のように語頭でも /ga/ に対応しているものもみられる。

また本土 /ka/ が, hakun (書く・搔く) のように喉頭摩擦音の /ha/ に対応しているものも認められる。

本土 /ko/ は /ku/ に対応しているものが多い。

kui (声) kukuru (心) kutsi (背中<腰>) ku (漕ぐ) kutsun (去年<こぞ>) taku (蛸) tuku (仏壇<床>) fukudzi (埃)

本土 /ko/ が, 語頭, 語末に限らず mugu (婿) gumahan (小さい<細かい>) のように有聲化して /gu/ に対応している例も認められる。

本土 /ko/ が, pitifu (従兄弟) fukuban (黒板) のように /fu/ に対応する例もみられる。

本土 /ku/ は, そのまま /ku/ に対応しているものと, 唇齒摩擦音の /fu/ に対応するものがある。加治工真市氏はこの点について八重山方言一般の傾向として, 当該拍に後続する音が有聲のものは /ku/ に, 無声のものは /fu/ にそれぞれ対応する傾向があると述べている(加治工1987)。しかしながら氏も述べているように, 波照間方言の場合においてもその例外が多く存する。歴史的に考えれば, k→f の音変化が o・u 統合の前に始まっており, o 母音よりも u 母音の前において先行して音変化が進みつつあることを物語っていると考えられる。

kundzu: (九十) kurabirun (比べる) ku (来る) kuruman (車) tukuri (徳利) fukuru (袋) raku (楽) fukuban (黒板) <以上 /ku/ に対応>

fu (釘) futsarun (腐る) fumon (雲) futsi (口・櫛) futsa (草) futfiri (葉) fumun (汲む) fusahan (臭) jafu (厄) <以上 /fu/ に対応>

本土 /ku/ が, 語頭・語末に限らず有聲化して /gu/ に対応している例も認められる。

pjaxu (百) rugudzu (六十) gudzira (鯨)

本土 /kwa/ (合拗音) は, kwan (棺) のようにそのまま /kwa/ に対応するが, kosi (菓子) のように /ko/ に対応するものもみられる。

(7) 本土方言のダ行音とは次のような対応関係を示す。

本土	de	da	do
		/ \	
波照間	zi	da	na
		/ \	
		zi	du

本土 /de/ は破擦音化して /zi/ に対応している。

dzigirun (出来る) ?udzi (腕) mugadzi (百足) ndzirun (出る<いでる>)

本土 /de/ が, 直前の拍が無聲化する環境で futfi (筆) のように無聲化した /ci/ に対応するものがある。

また, ffi (袖) のように促音に対応するものもみられる。

本土 /da/ はそのまま /da/ に対応しているものが多い。

da:gumutsi (団子餅) dabi (葬式<茶毘>) mada (まだ) juda (枝) nanda (涙)

本土 /da/ が, 直前の拍が無聲化する環境で ?asita (下駄<足駄>) のように無聲化した /ta/

に対応するものがある。

また、やはり直前の拍が無声化する環境において、鼻音化した /na/ に対応しているものが観察される。この場合の /na/ の拍は子音部分が無声化している。

fina (太陽<てだ>) pinari (左) sinatsun (育つ) sinatsirun (育てる)

本土 /do/ は /du/ に対応している。

duru (泥) jadu (戸<家戸>) bunduri (踊り) ?undun (位牌立て<御殿>) ?udurugun (驚く) mudurun (戻る)

本土 /do/ が、直前の拍が無声化する環境において kanu (角) のように鼻音化した /nu/ に対応しているものがある。この場合の /na/ の拍の子音部分は無声化している。

(8) 本土方言のタ行音とは次のような対応関係を示す。

本土	te	ta	to
	/ \		
波照間	ci	si	tu

本土 /te/ は、破擦音化して /ci/ に対応しているものと、摩擦音化して /si/ に対応しているものがある。これは、/te/→/ti/→/ci/→/si/ という一連の変化過程のそれぞれ /ci/ 段階と /si/ 段階に相当するものと考えられる。

mutfi (顔<おもて>) tatfirun (立てる) situmutfi (早朝<つとめて>) <以上 /ci/ に対応>

fi: (手) figami (手紙) findzo: (天井) firun (照る) ffirun (捨てる) <以上 /si/ に対応>

本土 /te/ が、dgin (天) のように有声破擦音の /zi/ に対応している例も見られる。

本土 /ta/ はそのまま /ta/ に対応している。

tani (種) tatame: (畳) takabu (煙草) tarurun (頼む) sita (舌) futatsi (二つ) ?ita (板)

本土 /to/ は /tu/ に対応している。

tu: (十) turi (鳥) tun (研ぐ・妻<刀自>) turun (取る) tubun (飛ぶ) pitu (人) ?itu (糸) ?utu (音)

本土 /to/ が、paton (鳩) のようにそのまま /to/ に対応しているものもある。

また、本土 /to/ が ?itifu (従兄弟) のように /ci/ に対応している例も見られる。

(9) 本土方言のザ行音とは次のような対応関係を示す。

本土	zi	zu	ze	za	zo	zju
	/ \					
波照間	zi	zi	za	cu	zu	

本土 /zi·zu/ は /zi/ に統合している。

dzi: (字) ?adzi (味) gudzira (鯨) gidzimi (糞<けじめ>) so:dzi (掃除) kidzi (傷) sidziri (硯) dzo:dzi (上手)

また本土 /zi·ze/ が、直前の拍が無声化する環境において無声破擦音の /ci/ に対応しているものがみられる。

patsimarun (始まる) patsimirun (始める) katsira (芋蔓<かずら>)

本土 /zi/ が、tun (妻<刀自>) のように語末で撥音 /N/ に対応しているものもある。

本土方言においては、一部方言を除いて音韻において四つ仮名の区別はとどめていないが、波照間に限らず琉球方言一般にもこの区別は認められない。

tundzi (冬至<とうじ>) ko:dzi (麴<かうぢ>) kadzi (数<かず>) midzi (水<みづ>)
本土の /ze/ は, dzin (銭・膳) のように /zi/ に対応している。

また本土 /ze/ が, 直前の拍が無声化する環境において katʃi (風) のように無声破擦音の /ci/ に対応しているものがある。

本土 /za/ はそのまま /za/ に対している。

dza: (部屋<座>) ʔadzan (ほくろ<痣>)

また本土 /za/ は, 直前の拍が無声化する環境において katsarun (飾) のように無声破擦音の /ca/ に対応しているものがある。

本土 /zo/ については, 無声破擦音の /cu/ に対応する語例が得られた。これについて他のオ段拍の対応からは /zu/ に対応することが予想されるが, 直前の拍が無声化する環境以外の語例が得られなかったためである。

kutsun (去年<こぞ>) putsu (臍<ほぞ>)

本土 /zju/ は直音化して /zu/ に対応している。

nindzu (二十) sandzu (三十) sīndzu (四十) dzuŋwatsi (十月) dzuguja (十五夜)

(10) 本土方言のツァ行音とは次のような対応関係を示す。

本土	ci	cu	cja
	ci	si	sa
波照間			

本土方言の /ci・cu/ は, 統合して /ci/ に対応しているものと, 摩擦音化して /si/ に統合しているものがある。これは, /ci・cu/→/ci/→/si/ という一連の変化過程のそれぞれ /ci/ 段階と /si/ 段階に相当するものと考えられる。

futsi (口) mutsi (餅) mītsi (道) pa:tsi (蜂) katatsi (蜂) sagotsi (正月) pitu:tsi (一つ) futatsi (二つ) matsi (松) ʔimpitsi (鉛筆) simutsi (本<書物>) <以上 /ci/ に対応>

sikara (力) sikahan (近い) musimē (餅米) si:sahan (強い) sikon (使う) sikurun (作る) sinun (注ぐ) siken (月) sira (顔<つら>) sina (綱) musikassahan (難しい) ʔissi (五つ) <以上 /si/ に対応>

本土 /ci・cu/ が, 直前の拍が無声化しない環境において有声破擦音の /zi/ に対応しているものが認められる。

dzi: (地・血・乳) sanidzi (三日) kunidzi (九日) dzi:bun (交尾する<つるむ>)

また本土 /cu/ が中舌母音拍とならずに /si・su/ と対応する例も見られる。

fino: (角) fimi (爪) supu (壺)

本土 /cja/ は, sa: (茶) sako:ʃi (嫡子) のように摩擦音化・直音化し /sa/ に対応している。

(11) 本土方言のサ行音とは次のような対応関係を示す。

本土	si	su	se	sa	so
	ci	si	si	sa	su
波照間					

本土 /si・su/ は、/sī/ に統合している。

sī: (汗・巢) sīsī (肉くしし)・煤 sinun (死ぬ) sītari (下) sima (島) musī (虫)
 ?usi (牛・臼) sin (墨) sīdzīri (硯) sīsahan (酸っぱい) garasi (烏) jasimun (休
 む)

本土 /si・su/ が中舌母音拍とならずに /si・su/ や促音 /q/ と対応する例も見られる。

?ifi (石) fiken (試験) fini (脛くすね) nusumun (盗む) ffirun (捨てる)

また本土 /si/ が、直前の拍が無声化する環境において破擦音の /ci/ に対応している例が認められる。

futsī (口) patsī (橋) tutsī (年) kutsī (背中<腰>) putsī (星)

また本土 /su/ も、同様の環境において futfiri (葉) のように破擦音の /ci/ に対応するものがある。

本土 /se/ は /si/ に対応している。

fin (千) finfin (先生) fimirun (ねだる<責める>) ?afi (汗) jufirun (寄せる)

本土 /se/ が、sipahan (狭い) sinjutsë: (洗骨) のように中舌母音拍の /si/ に対応するものもみられる。

本土 /sa/ はそのまま /sa/ に対応している。

saki (酒) saru (猿) sara (皿) sata (砂糖) sakirun (裂ける) fusahan (臭い)

本土 /sa/ が直前の拍が無声化する環境において破擦音の /ca/ に対応するものが認められる。

patsan (鉄) futsa (草)

本土 /so/ は /su/ に対応している。

sud (損) supa (傍<そば>) sururun (揃う) suruban (算盤)

本土 /so/ が中舌母音拍の /si/ や促音 /q/ に対応するものもみられる。

sīnatsun (育つ) ?asīpi (遊び) fji (袖)

また本土 /so/ が、fimirun (染める) mifu (味噌) のように /si/ や /sju/ に対応するものもみられる。

(2) 本土方言のラ行音とは次のような対応関係を示す。

本 土	ri	re	ra	ro	ru
				/	\
波照間	rī	rī	ra	ru	

本土 /ri/ は /rī/ に対応している。

turī (鳥) parī (針) ?arī (蟻・東<上がり>) nurī (糊) bunduri (踊り) matsiri (祭り)

本土 /ri/ がそのまま /ri/ に対応する例もみられる。

na:ri (果実<生り>) pinari (左) futfiri (葉)

また本土 /ri/ が、破擦音の /zi/ や破擦音の /si/ に対応するものもみられる。

fukudzī (埃) kibusi (煙) kīsī (霧)

本土 /re/ は /ri/ に対応している。

parirun (晴れる) ma:rirun (生まれる) bagari (分家<分かれ>)

本土 /re/ が、kurī (これ) のように中舌母音拍の /rī/ に対応する例もみられる。

本土 /ra/ はそのまま /ra/ に対応している。

raku (楽) tara (俵) tira (寺) pira (唐鋤<へら>) garasi (烏) kurabirun (比べる)

本土 /ra/ が、/pi/ の拍に先行される環境において、pisa (手の平<平>) のように摩擦音の /sa/ に対応する例が認められる。

本土の /ro・ru/ は /ru/ に統合している。

ru: (櫓) rugudzu (六十) duru (泥) ?iru (色) fukuru (袋) miruku (彌勒)
juru (夜) piru (昼・ひる) taru (樽) puruma (車) sirusi (牛の耳版<印>)

本土 /ro・ru/ が、korri (香炉) ?arigun (歩く) のように中舌母音拍の /ri/ に対応するものがみられる。

本土 /ru/ が、marohan (丸い) のように /ro/ に対応するものもみられる。

また本土 /ro/ が、/pi/ の拍に先行される環境において、pisoan (広い) のように摩擦音の /so/ に対応する例が認められる。

(13) 本土方言のナ行音とは次のように対応関係を示す。

本土	ni	ne	na	no	nu
				/	\
波照間	N	ni	na	nu	

本土 /ni・ne/ は /ni/ に統合している。

nindzu (二十) nisi (北<西>) nimutsi (荷物) puni (骨) funi (船) nini (根) nitsi (熱) tani (種) pani (羽) kani (金属<金>) fini (脛<すね>)

本土 /ni/ が語末の環境において撥音 /N/ に対応しているものが認められる。

?un (鬼・うに) dgin (銭) kan (蟹)

本土 /na/ はそのまま /na/ に対応している。

nan (名・波) nanatsi (七つ) na:gun (泣く) narasun (教える<習わす>) pana (鼻・花) katana (包丁<刀>)

本土 /no・nu/ は /nu/ に統合している。

nunu (布) nun (野・蚤・のみ・縫) numun (飲む) munu (物) bunu (斧) nurun (塗る) musumun (盗む) ?inu (犬) sinu (着物<きぬ>)

本土 /no/ が、tarumun (頼む) のように弾き音の /ru/ に対応するものもみられる。

(14) 本土方言のバ行音とは次のような対応関係を示す。

本土	bi	be	ba	bo	bu
				/	\
波照間	bi	bi	ba	bu	

本土 /bi/ は /bi/ に対応している。

bi (指) ?ibi (海老) tabi (旅) dabi (葬式<茶毘>)

本土 /bi/ が、直前の拍が無声化する環境において無声化した /pi/ や /pi/ に対応する例がある。

?asipi (遊び) tupiju: (飛び魚)

本土 /be/ は /bi/ に対応している。

nabi (鍋) kurabirun (比べる)

本土 /be/ が、直前の拍が無声化する環境において sipirun (滑る) のように無声化した /pi/ に対応する例がある。

本土 /ba/ はそのまま /ba/ に対応している。

buba (伯・叔母) budzama (伯・叔父) kutuba (言葉) suruban (算盤)

本土 /ba/ が、主として直前の拍が無声化する環境において無声化した /pa/ に対応している例も見られる。

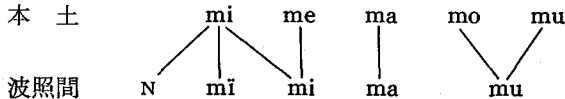
supa (傍そば) futjipaku (筆箱) sampa (産婆)

本土 /bo・bu/ は /bu/ に統合している。

ji:bu (歳暮) nuburun (昇る) kubu (昆布) katsu:busi (鯉節)

本土 /bo/ が、直前の拍が無声化する環境において supu (壺) のように無声化した /pu/ に対応する例もみられる。

(15) 本土方言のマ行音は次のような対応関係を示す。



本土 /mi/ は、中舌母音拍の /mi/ に対応するものと、/mi/ に対応するものがある。

mĩtsi (三つ) mĩta:ri (三人) mĩtsi (道) parumi (妊娠) <以上 /mi/ に対応>

migi (右) midzi (水) min (耳) mirun (見る) mifu (味噌) figami (手紙) <以上 /mi/ に対応>

本土 /mi/ が語末の環境において撥音 /N/ と対応しているものが認められる。

min (耳) sin (墨) san (風) nan (波) kan (神) nun (蚤・のみ) ?an (網) ?ugan (拝所<拝み>) patsan (鉄) kangan (鏡)

本土 /mi/ が、直前の拍が無声化する環境において kapi (紙) のように無声閉鎖音の /pi/ に対応している例も見られる。

本土 /me/ は /mi/ に対応している。

min (目) jimi (爪) ma:mi (豆) ?ami (雨) jumi (嫁) fumirun (替める)

本土 /ma/ はそのまま /ma/ に対応している。

maju: (眉) matsi (松) ma:gun (巻く・撒く) ?amahan (甘い) mman (馬) jama (山)

本土 /ma/ が、直前の拍が無声化する環境において sipahan (狭い) のように無声閉鎖音の /pa/ に対応している例も見られる。

本土 /mo・mu/ は /mu/ に統合している。

mutsi (餅) munu (物) mundarasi (腿) mutsun (持つ) mudurun (戻る) simu (肝) mugu (婿) mun (麦) musĩ (虫) mugasi (昔) mugadzi (百足)

本土 /mo/ が、fumon (雲) のように /mo/ に対応する例がある。

また本土 /mu/ が、kibusi (煙) のように閉鎖音の /bu/ に対応する例も見られる。

3. 拍連続の対応

(1) 本土 /Ce'i/ は /Ci:r/ に融合している。

ji:tu (生徒) ji:bu (歳暮)

(2) 本土 /Ca'i/ (歴史的仮名遣いでアヒ・アキを含む) は /Cë(R)/ 対応するものと、/Ce(R)/ に対応するものがある。これは、/Cë(R)/ を含む各語例に /Ce(R)/ との形態上の揺れの存するところから、/Ca'i/→/Ca'i/→/Cë(R)/→/Ce(R)/ という一連の変化過程のそれぞれ /Cë(R)/ 段階と /Ce(R)/ 段階に相当するものと考えることができる。

kë: (卵<かひ>) pë:rifutsi (入り口) më: (稲<米>) ?assinë: (商い) musimë (餅米) pakamë:ri (墓参り) <以上 /Cë(R)/ に対応>

pe: (灰) pe:run (入る) te:ku (太鼓) fute (額) ?ibe: (位牌) matsige (怪我<間違い>) ?utage (疑い) jafubare: (厄払い) kaminige (神願い) <以上 /Ce(R)/ に対応>

本土 /Ca'i/ が, nin (地震<なる>) のように /Ci/ に対応するものもみられる。

(3) 本土 /Ca'e/ (歴史的仮名遣いでアへを含む) は /CeR/ に対応している。

me: (前) pe: (蠅・南<はえ>) ke:sun (返す)

また /Cage・Cake/→/CeR/ の融合例がみられる。これは、/g・k/→/'/ のように子音が語的に脱落し、そののち母音連続が融合したことを示している。

ke: (影) pite: (畑)

この他に /Co'e・Ca'ja・Ca'wa/→/CeR/ の融合例もみられる。

me:run (燃える) pe:fahan (早い) ke: (井戸<川>)

(4) 本土 /Ca'wa・Caga/ は /Ca(R)/ に対応するのが一般的である。このことは /'w・g/→/'/ のような子音の脱落が語的に認められることを示している。また本土 /Ca'wa/ の拍連続は歴史的仮名遣いではアハに相当し、波照間を含めて琉球方言全般においてもハ行転呼が歴史的に存在したことを物語っている。

tara (俵) kara (川<川原>) ka: (皮) ?an (粟) ma:ri (まわり) narasun (教える<習わせる>) ?usina (沖繩) nahan (長い) ?ari (東<上がり>) jamami (山亀)

この他, da:gu (道具) sagotsi (正月) のように本土 /C(j)a'u/ が /Ca(R)/ に融合しているものがある。

(5) 本土 /Ca'u・Ca'o/ は /Co(R)/ に対応するのが一般的である。/Ca'u・Ca'o/ の拍連続は歴史的仮名遣いではアウ・アフ・アヲ・アホに相当し、ここでもハ行転呼の存在を物語っている。

?on (扇) po:tsi (箒) kon (買う) ko:dzi (麴) so:dzi (掃除) ko: (線香<香>)

pinto: (返事<返答>) pinso: (貧乏<貧相>) funto: (本当) sikon (使う) ?utagon (疑う) sato: (茶湯) no:sun (直す) so: (竿) ?o:ju: (ふだい<青魚>)

同様に本土 /Cja'u/ の拍連続も /Cjo(R)/ または /Co(R)/ に対応している。

dzo:gi (定規) findzo: (天井) dzo:dzi (上手) dzo:tu (良い<上等>) kongi (芝居<狂言>) kundzo (根性) guso: (後生)

本土 /Ca'u/ が, ku: (甲) gaku (学校) のように例外的に /Cu(R)/ に対応しているものもみられる。

(6) 本土 /Co'u/ (歴史的仮名遣いでオフを含む) は /Cu(R)/ に対応するのが一般的である。

mun (思う) tun (問う) du: (自分<胴>) tu: (十) tundzi (冬至) sinu (昨日)

dzo:tu (良い<上等>)

同様に本土 /Ce'u/ は, kju: (今日) のように /Cju/ に対応している。

また本土 /Coko/ が, *nugiri* (鋸) のように /Cu/ に対応していることは, /k/→/ʔ/ のような音の脱落が認められることを示している。

本土 /Co'u/ が, *bo:* (棒) *ninto:* (年頭) のように例外的に /CoR/ に対応関係している例もみられる。

(7) 本土 /CirV・CurV/ は, 第二拍目の /r/ が第一拍目の子音に同化し, 更に第一拍目が促音化した /qCV/ という相に対応しているものが多く認められる。

ffa (倉) *ffahan* (暗い) *ffun* (降る・振る) *ffanu* (降らない・振らない) *ʃfan* (知っている) *baʃfirun* (忘れる) *ssuhan* (白い)

第二拍目が合拗音となって, *mikkwa* (盲人) のように /qCwV/ と対応しているものも見られる。

第一拍目の促音が脱落して /CV/ と対応している例も認められる。これは音変化が /CirV・CurV/→/qCV/→/CV/ まで進んでいることを示している。

san (虱) *Fuhan* (黒い) *ʔaba* (油)

第一拍目が促音化せずに, *pisa* (手の平<平>) *pisohan* (広い) のように /CisV/ に対応しているものも見られる。

(8) 語中の本土 /g・d・z/ の子音の前に撥音が挿入されていることが多い。これらは, 本土の高知方言や東北方言などに, あるいはコリヤードなど一部のキリタン資料にみられるのと同様の前鼻音が波照間方言でもかつて存在しそれが一拍として固定されたものと考えられる。但し /b/ の前にはこのような撥音は見いだすことができない。

konggi (桑<桑木>・芝居<狂言>) *kangan* (鏡) *nangirun* (投げる) *mangarun* (曲がる) *ningwatsi* (二月) *pingan* (彼岸) *singwatsi* (四月) *gungwatsi* (五月) *kungwatsi* (九月) *dzungwatsi* (十月) *nanda* (涙) *bundurī* (踊り) *ʔundun* (位牌立て<御殿>) *sindzu:* (四十) *nindzu:* (二十) *gundzu:* (五十) *kundzu:* (九十) *sindzunikunitsi* (四十九日) *tundzi* (冬至)

(9) 語末の本土 /CV/ の後に撥音 /N/ が添加されていることがある。

nin (地震<なる>・根) *pin* (屁) *min* (目) *fumon* (雲) *nan* (名) *man* (馬) *ʔan* (粟) *kutsun* (去年<こぞ>) *sikin* (<曆上の>月) *sikimatsin* (月末) *siken* (月) *pan* (歯) *paton* (鳩) *ʔadzan* (ほくろ<痣>) *nun* (野) *pin* (日) *kuruman* (車) *bin* (蘭) *doran* (銅羅) *putugin* (仏像<仏>)

(10) 波照間方言において /Cu/ で終わる名詞に助詞 /'a/ (は) が付いた時の音連続は, 形態変化して /Cwa(R)/ に対応している。

mugu→*mugwa* (婿は) *paku*→*pakwa* (箱は) *jadu*→*jadwa* (宿は) *butu*→*butwa* (夫は) *gundzu*→*gundzwa* (五十は) *putsu*→*putswa* (臍は) *duru*→*durwa* (泥は) *bunu*→*bunwa* (斧は) *takabu*→*takabwa* (煙草は) *sipu*→*sipwa* (壺は) *midumu*→*midumwa* (女は)

同様に /Cju(R)/ で終わる名詞に助詞 /'a/ (は) が付いた時の音連続は, 形態変化して /Cjwa(R)/ に対応している。

kju→*kjwa* (今日は) *mandgu*→*mandzwa* (ペパイヤ<饅頭>は) *matfu*→*matfwa* (蹠は) *katfu* や *katfwa* (鯉は) *ʔujantfu*→*ʔujantfwa* (鼠は) *mifu*→*mifwa* (味噌は)

4. 音 変 化

以上の個別拍・拍連続の対応関係の記述を通じて波照間方言の歴史の中で想定される顕著な音変化について項目化すると次の諸点にまとめることができる（具体的語例は省略する）。

1) 母音について

(1) /i/→/i/ (→/i/)

中舌母音 /i/ が再び /i/ に変化している拍は本土 /i・ni/ があげられる。その他の子音拍にもこの傾向は部分的に認められ、特に本土 /mi/ については顕著な傾向を示す。これは、波照間方言においても3母音化の傾向が始まっていることを示しており、いずれは西表租納方言や与那国方言のように /i・a・u/ の3母音体系になっていく過程と思われる。

(2) /e/→/i/

(3) /o/→/u/

(4) /u/→/i/ (→/i/)

中舌母音 /i/ が /i/ に変化している拍は本土 /zu・cu・su/ に限られる。

2) 子音について

(1) 閉鎖音化の傾向（主として両唇摩擦音について認められる）

/w/→/b/ (/wi/→/bi/ /we/→/bi/ /wa/→/ba/ /wo/→/bu/)

このほか小数ながら以下の例も認められる。

/m/→/b・p/ (/mu/→/bu/ /mi/→/pi/)

(2) 閉鎖音から破擦音化の傾向（主として歯茎閉鎖音について認められる）

/d/→/z・c/ (/de/→/zi・ci/)

/t/→/c・z/ (/te/→/ci・zi/)

このほか小数ながら以下の例も認められる。

/k/→/c/ (/kī/→/cī/)

(3) 摩擦音から破擦音化の傾向（歯茎摩擦音について認められる）

/s/→/c/ (/si/→/cī/ /sa/→/ca/ /su/→/ci/)

(4) 閉鎖音から摩擦音化の傾向

/p/→/f/ (/pu・po/→/fu/)⁵⁾

/k/→/s/ (/ki/→/sī/)

/t/→/s/ (/te/→/si/)

このほか小数ながら以下の例も認められる。

/k/→/f/ (/ko/→/fu/)

/k/→/h/ (/ka/→/ha/)

/d/→/s/ (/de/→/si/)

(5) 破擦音から摩擦音化の傾向（歯茎破擦音について認められる）

/c/→/s/ (/ci・cu/→/sī/ /cu/→/si・su/ /cja/→/sa/)

(6) 鼻音化の傾向

/d/→/n/ (/da/→/na/ /do/→/nu/)

このほか小数ながら以下の例も見られる。

/g/→/n/ (ge/→/ni/ /gu/→/nu/)

また逆に以下のように非鼻音化する傾向も小数ながら認められる。

/n/→/r/ (/no/→/ru/)

/m/→/b·p/ (/mu/→/bu/ /mi/→/pi/ /ma/→/pa/)

- (7) 有声化の傾向 (直前の拍が無声化しない環境において)

/k/→/g/ (/ki/→/gi/ /ka/→/ga/ /ko/→/gu/)

/c/→/z/ (/ci/→/zi/)

このほか小数ながら以下の例も見られる。

/p/→/b/ (/po/→/bu/)

/t/→/z/ (/te/→/zi/)

- (8) 無声化の傾向 (直前の拍が無声化する環境において)

/d/→/t/ (/da/→/ta/)

/d/→/c/ (/de/→/ci/)

/z/→/c/ (/zi/→/ci/ /ze/→/ce/ /za/→/ca/ /zo/→/co/)

/b/→/p/ (/bi/→/pi/ /be/→/pe/)

/m/→/p/ (/ma/→/pa/)

- (9) 脱落の傾向

/w/→/ʔ/ (/Ca'wa/→/Ca'a/→/CaR/)

/g/→/ʔ/ (/Cage/→/Ca'e/→/CeR/ /Caga/→/Ca'a/→/CaR/)

/k/→/ʔ/ (/Cake/→/Ca'e/→/CeR/)

- (10) 撥音化の傾向

/gi·'i/→/N/

このほか小数ながら以下の例も認められる。

/zu·cu·'u/→/N/

- 3) 拍連続について

- (1) /Ce'i/→/CiR/ の傾向 (長音化)

- (2) /Ca'i/→/CëR/ (→/CeR/) の傾向 (長音化)

- (3) /Ca'e·Cage·Cake/→/CeR/ の傾向 (長音化)

- (4) /Ca'wa·Caga/→/CaR/ の傾向 (長音化)

- (5) /Ca'u·Ca'o/→/CoR/ の傾向 (長音化)

また /Cja'u/→/CoR/ の傾向 (長音化)

- (6) /Co'u/→/CuR/ の傾向 (長音化)

- (7) /CiRv·CurV/→/qCV/ (→/CV/) の傾向 (促音化)

- (8) /-g·-d·-z/→/-Ng·-Nd·-Nz/ の傾向 (撥音の挿入)

- (9) /-#/→/-N#/ の傾向 (語末の撥音の添加)

これらの項目の音変化が重層的になんらかの順序で生じた結果、現在の波照間方言の音韻の姿が形作られるに至ったと考えられる。項目間の歴史的順序については波照間方言だけでなく先島方言全般を考察の対象としなければ確定できない要素が多いので、別稿に譲ることとする。

注

- 1) 波照間方言の音素体系の概要については、平山・大島・中本(1967)、中本(1976)に報告されている。また平山(1988)にも久野眞・大野眞男による報告がある。本論の目的は、波照間方言の共時的体系を記述することではなく、音対応を通じて波照間方言の音変化の歴史という通時的問題を考察することにあるので、各音素・各拍構造・各特徴的音声現象に関する具体的語例は平山(1988)を参照されたい。
- 2) 先島諸方言において本土 /i/ に対応する /i/ が多くの地点で観察される。また /ni/ に対応する /ni/ は、先島諸方言において見いだすことができないが、ci→ci の音変化の過程において不安定ながら過渡的に存在し得た可能性は否定できない。
- 3) 本論において代表的な対応語例を音声記号で表示するが、その際に音声記号であることを示すかぎ [. . .] は省略した。また波照間方言では無声化の傾向が顕著であるが、無声化の補助記号 [.] も語例表記に際して印刷の便宜上省略した。また用言を語例としてあげる場合、語幹部のみを対応の資料として扱い、活用は必ずしも終止形をあげてはいない。語例の意味は (. . .) で示したが、語形の直訳対応形は < . . . > で示した。
- 4) 本土 /hu/ は、先島の中でも宮古諸島においては /fu/ [fu] に対応しており、波照間を除く八重山諸島・与那国島では /hu/ [ɸu] に対応している。
- 5) ここでいう /p/ とは本土ハ行音との対応を指す。本論 2. (4) を参照。

黍植え・黍刈りでお忙しい農作業の合間の貴重な時間をさいて、話者として惜しみなくご協力下さいました、新城康佑氏・上里真知氏、大嵩嘉一氏・大嶺茂子氏・大嶺ナリ氏・親盛ヨシ氏・勝連文雄氏・川平光氏・崎枝ミツヨ氏・島尻カツミ氏・仲底長幸氏・西石垣全助氏・西島本盛重氏・西田原清氏・富底正一氏の皆様と、調査に際して便宜をお計らい下さいました竹富町教育委員会の皆様に心よりお礼を申し上げます。

【参考文献】

- 平山輝男編著 1983 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』
 平山輝男編著 1988 『南琉球の方言基礎語彙』
 平山輝男・中本正智 1964 『琉球与那国方言の研究』
 平山輝男・大島一郎・中本正智 1966 『琉球方言の総合的研究』
 平山輝男・大島一郎・中本正智 1967 『琉球先島方言の総合的研究』
 法政大学沖縄文化研究所編 1977 『琉球の方言 宮古大神島』
 加治工真市 1980 「与那国方言の史的研究」(『黒潮の民族・文化・言語』)
 加治工真市 1982 「琉球、小浜方言の音韻研究序説」(『琉球の言語と文化』)
 加治工真市 1984 「八重山方言概説」(『講座方言学10 沖縄・奄美の方言』)
 加治工真市 1987 「八重山方言の比較音韻論序説」(『琉球方言論叢』)
 松本克己 1986 「通時的にみたことばの記述」(『応用言語学講座』2)
 中本正智 1976 『琉球方言音韻の研究』